

指揮官が代理人になりまして

スツーカー

UMP45を庇って被弾し、植物状態となってしまった指揮官。そこに実験材料が欲しいI・O・Pの天才科学者ベルシカが指揮官の脳の中身を自律人形に移し替えることを提案する。承諾した指揮官とUMP45だったが、移し替える先の自律人形は、なんと鹵獲された敵の上級人形≡代理人≡であった…

目次

第 2 話	第 1 話
-------	-------

第1話

友人と話してて思い付いたネタです。思い立ったら更新するので基本続かないと思ってください。鉄血人形の中で代理人が一番好き。二番目はデストロイヤー

「ここは私が食い止めるから早く撤退して！」

「ダメだ！ お前を置いて逃げるなんて出来ない！」

「早く！ 私のことなんかどうでも……きやつ！」

軽い衝撃と共に地面に叩きつけられ、直後に私の体に重たい何かがかかった。視界に写るのは赤いベレー帽と厚手のコート、そして溢れ出るドス黒く生暖かい液体……

「し、指揮……かん……？」

私の声に返事は返ってこない。あの声の代わりに生暖かい人間の血がドクドクと流れ出て私の服を、半身である銃を、体を赤く染め上げる。指揮官の体を揺すっても、声を上げてても、返ってくるのは赤い血潮と徐々に弱くなる心臓の鼓動。認めない。認めたくない。どうして私なんかを庇ったのか。どうして、どうしてと繰り返し、繰り返し問い続け電腦がエラーを吐き出しまくる。視界と体がガタガタと震え

て、腕が吹き飛び銃弾で穴だらけになった指揮官を抱きしめる。

「45！ 退路確保できたわ！ 今すぐ撤退するわよ！ ……45！」

416の怒鳴り声も私に届かない。ただ私を庇い、指揮官が死にかけ、それを否定し、元に戻ってと懇願するループが電腦を支配する。

「UMP45！」

パシッ

「っ！」

銃声と爆発音の中、416の平手打ちの音だけがやけに大きく響いた気がした。

416は私の胸倉を掴むと今まで見たこと無い剣幕で迫った。

「よく聞きなさいUMP45、あなたは部隊を生かして帰す気は無いの？ こんな状態になった指揮官を一刻も早く連れて脱出する気は無いの？ こんなところでエラー吐いて悲劇のヒロイン気取って死ぬ気なの？ さあ答えなさい！ 今すぐ引きずってでも指揮官を連れてへりに乗るか、それともここで何もせず死ぬか？ さあ！」

416の言葉にエラーはピタリと止まった。そうだ、こんなところで死んでられない。腕が吹き飛んで銃創で大量出血しているけど指揮官はまだ生きている。いつの間にか出た涙を拭って徐々に軽く冷たくなる指揮官を担いで走った。銃も発煙手榴弾も強化外骨格も、全部かなぐり捨てて、今までに無い速さでへりに転がり込む。そして急いでゴムバンドや止血剤をかき集めて止血し、傷を塞ぎ、意識のない

指揮官に話しかけながら心臓マッサージして弱りゆく鼓動を必死に繋ぎとめて、いつの間にか担架に乗せられた指揮官の手を繋ぎ、そして集中治療室の前で泣きながら指揮官が帰ってくるのを祈った。

……なんだか暖かくて気持ちいい。ふと目を覚ますと9と目が合った。どうやら泣き疲れて眠ってしまったらしい。いつもは私が膝枕しているのに、こんな時に限って逆の立場。すこし恥ずかしいけど、たまにはいいかもと思った。お姉ちゃんおはよう。いつも通りの言葉のはずなのに、その表情は暗く悲しそうだった。

「……そうだ、指揮官。指揮官は？ もう手術は終わったの？」

起き上がって9に問う。しかし9の表情は悲しく険しいものだった。

「45姉、よく聞いてね。指揮官の手術は成功したの。けどね……」

指揮官、植物状態になっちゃったみたい

植物状態、つまり心臓だけは動いてるけど意識は無い状態。嘘だ。あれだけ必死に応急処置したのに。最後の最後に私の名前を呼んでくれたのに。「必ず戻ってく

る」って言ったのに。嘘だ、嘘だと9の肩を掴み揺さぶる。

「お、落ち着いて45姉、指揮官のことでペルシカさんから話があるってさっき416が言ってたから。話だけでも聞いてみたらどうかな？」

「……ペルシカが？」

自律人形の研究開発において知らない者はいない天才科学者。けど人間は専門ではなかったはず。私は416からペルシカの場所を聞き、建物の隅にある彼女の個室のドアをノックした。

「UMP45かい？ あいてるよ、入って」

「失礼します」

ペルシカに割り当てられた部屋に入ると、書類やノートパソコン、電子機器の山々と中央のソファに座る不健康そうな白衣姿の女性がいた。天才と言われる人は皆こうなのか。若干頭が痛くなりそうになりながら言われるがまま対面する椅子に腰掛けた。

「まず、指揮官君について残念だったね。いや、医師たちを恨まないで。彼らは全力を尽くしたんだ。進歩した医学でもどうしようも出来ない事はある。それ

に辛うじて心臓が動いてるだけでも奇跡に近い。君がヘリの中で必死に止血や心臓マッサージをしたおかげだよ。よくやった」

「その、ありがとうございます」

ペルシカの言葉はまるで母の言葉のように沁み込んでくる。けど、その言葉を言うためにわざわざ呼んだわけではないだろう。

「まあ、単刀直入に聞いた方が早いね。君は、UMP45は指揮官君がどんな姿になっても帰ってきて欲しいと思うかい？」

「……本当に可能なんですか？」

「理論上は可能だよ。ただ生物の記憶となると不確定要素が多いから、絶対は無い。……よし、こんなもんな」

あの日から半月経ち、私たち404小隊はペルシカのいるI・O・Pの研究所16Labに来ていた。通された部屋は巨大な実験室とも、工場の生産室とも思えるものだった。そしてその部屋に鎮座するのは液体が入り様々な計器や管が繋がれた2つのカプセル。その片方には手術痕が残る痛ましい姿の指揮官、もう片方には鉄

血の人形、代理人が管に繋がれ入っていた。

「それじゃあ改めて説明するよ。指揮官君は植物状態で回復の見込みはなく、このままでは遠くない将来に亡くなる可能性が高い。そこで彼の脳の中身、要は記憶を一度データベースに移し、そこからこの代理人の電腦に直接書き込む。質問は？」

ペルシカが一通り説明し終わると振り返った。事前に説明は受けていたけど、やはり納得は行かない部分がある。

「いくつかいいかしら。なぜ鉄血のハイエンドモデルがここに？　そしてなぜ指揮官の記憶をあれに移す必要があるのかしら？　人形なら他にもいるでしょう」

「皆が聞きたいこと全部聞いてくれたね416。まあそう焦らずに1つずつ答えよう。1つ目の質問だけれど、あれはAR小隊が交戦した時に偶然にも中身が傷ついていない綺麗な状態で鹵獲できたものだよ。これほど綺麗な状態で鹵獲される鉄血製人形はそうそうない。2つ目に、人間の脳の中身を丸ごと移すとなると、そこから辺の人形とは比べものにならない容量の電腦が必要になる。そして解析し終わったばかりの代理人の電腦は指揮官君の記憶をなんとか収めれる容量だった。3つ目は新たに人の脳と同じスペックの電腦と、それを載せる人形を作ってる時間と費

用が無い。以上だ、理解してもらえたかな？」

理解はできる、けど理解したくない。確かに指揮官がどんな姿になってもいいから帰ってきて欲しいと思った。けれど、まさか鉄血のクズだとは思わなかった。そんなことになるなら、指揮官はそのままがいいと思った。でもこのままでは生命維持装置で生かしてもいずれ死んでしまう。ホルマリン漬けにしても生き返らせる技術ができる保証も、それまで私が生きてる保障もない。……これしかないのかな。「彼は手術直前のまだ意識がある時、君が承諾したら」という条件付きで了承を得てる。あとは君の判断次第だよ。考える時間は残り少ないけど、始めたらやっぱ無しには出来ない。よく考えて」

指揮官は私に判断を委ねた。それはつまり私にそれだけ信用と信頼を置いていて、私が帰ってきて欲しいと願うと思ったから、判断を委ねた。ならば私の指揮官の思いに応えなきゃ。

「ペルシカさん。どうか、よろしくお願いします」

Start up system Now Loading..
 Start up system download complete..
 Set up sequence start..
 Electronic brain scan start..
 Sensor connection Confirm
 Image recognition system all clear..
 Vision sensor, Tactile sensor, Auditory
 sensor, Taste sensor, Olfactory sensor op
 erate correctly
 I.O.P 16 Lab. Remodeling Ring leader Syst
 em ver Agent
 START

『改良型ハイエンドモデルシステム、起動シーケンス開始。モデル名≧代理人≧起動』

ゆっくりと目が開き、視界によくわからない文字と緑色の景色が映る。コポコポと気泡が上がっていき、その先に歪んだ風景が広がっている。どうやらSF映画にあるような液体で満たされたカプセルの中のようなのだ。

『起きたかい指揮官君。調子はどうだい？』

ヘッドホンから流れる音楽のように聞こえる聞き慣れた声。だが返事をしたくても口にチューブのようなものがはめられ、うめき声も出せない。

『ああ、失敬失敬、今から液体と管を抜くからちよつとまって』

湾曲したガラス越しに映る科学者が視界の端にある隣の計器を操作すると、液体が抜けて体中に重力を感じる。管やケーブルが引き抜かれ枷が外され、手足は自由になったが上手く力が入らない。……それに胸のあたりがやけに違和感を感じる。「電脳は正常、各種センサーは問題なし。今は最適化の最中だけどすぐ動けるようになるさ。生まれ変わった気分はどうだい？」

見慣れた顔が覗き込む。ぼんやりと覚えがある光景だ。確かUMP45を庇って死にかけながら手術室に運ばれた時、やけに笑顔なペルシカ女史が覗き込んで、「君は十中八九植物状態になるから、その時に脳を人形に移し替えるかい？」

と聞いてきたんだ。UMP45が良いと言ったらと答えたところで記憶は途切れてる。……自分が目覚めたという事は、まあそういう事なんだろう。

カプセルの縁を掴んで起き上がるのと、不健康なほど色白な肌の細い手と黒く長い髪。そして、豊満な胸が視界に映った。

「えっ……ええええええええええ！！！！」

アイエエエエ！ オンナ!? オンナナンデ!?

いやなんでだよ！ 普通男性モデルの自律人形に移し替えるでしょ！ なんて女性モデルなんだよ！ てかこの顔と髪型は鉄血人形のハイエンドモデルの代理人じゃないか！ なんてこうなった！

「あーっはっはっはっは！男が女の体になって困惑する姿。これが見たかったんだよ！いひひひひっ！久しぶりに大笑いさせてもらったよ指揮官くん。ふふっ、あははははっ！」

人の困惑した姿をダシにしやがってこのマッドサイエンティストめ……だがこれをやらなければそのまま意識は回復せず、いずれ死んでたと言うのだから強く言えない。クソツタレ……とりあえずなにも着ていないから、体に慣れるために着替える

ることになった。個人的には一刻も早くUMP45に会いたいんだが、ペルシカがいる間に最適化を済ませてデータを収集し様子を見たいとのことで目の前で着替えさせられた。

「あの……物凄く恥ずかしいんで、出てけとは言いませんが向こう向いてもらえませんか？」

「君は女性の服を補助なしに着られるのかい？ それに体と電腦の最適化が済んでないから動きもぎこちないじゃないか。さっ、変なことしないからこれを着たまえ」

そう言って差し出したるは黒色の大人な下着とガーターベルト。待って、ちょっと前まで男だった奴が着る下着じゃない。

「ほらほら、これ以外下着は無いから早く着ないと直で服着ることになるよ？ 手取り足取り教えて上げるから羞恥心は今のうちに捨てなさい♪」

なんでこいつそんな笑顔で機嫌良いの？ 俺なんかペルシカに酷いことしたっけ？ しかし言われたことやるしかない。それになぜか抵抗できず、言われた通りに下着を付けていく。次はガーターベルトとパンツだ。

「パンツは先に穿くかい？ 後に穿くかい？」

「えっと、先で」

「先に穿くとトイレ大変だよ？」

「なら後で」

「後に穿くそう言うのが好きな人に見られるよ」

「どっちにすりゃいいんだよ！」

結局先に穿いた。だって股間がスースーするの早く何とかしたかったんだ。あと嫌でも息子が無いことが実感させられた。心が折れそう。もう無心で着替えようと思ったが差し出されたのは代理人のメイド服。おい待てやG&Kの制服はどうした。なーにがその身体にはメイド服一択じゃ、絶対に着ないからな。わかった、わかったよ全く。着ればいいんだろ着れば。まあ、他のハイエンドモデルの鉄血人形よりはまともな服なのでまだマシである。あとは髪型を整えてもらい完成。ついでに視界に最適化完了の文字が浮かび上がる。実感はないが、考えた通りに体が動くようになったんだろう。

「これで十分でしょう。それじゃ、感動の再会といこう。ああ、一つ言い忘れてた。

君はちゃんとI・O・P製人形として登録されてるから、味方から撃たれる心配はないよ。安心して」

それはよかった。前線で指揮してて敵に間違われましたじゃ話にならないからな。

「それから……万が一のことを考えて、君はI・O・PとG&Kの人間と人形には逆らえないようになってるからね」

……え？

逆らえなくて好きにされるっていいですよ。ってわけで代理人と電子戦に強い45の百合を目指します(続くとは言っていない)

第2話

なぜか続きました

「さあ感動の再会だよ。胸を張ってほら」

「いやー45のやつどんな顔するかなー驚くかなー……ってなると思います？」

それなりに広く清潔な研究所の廊下を歩く白衣とメイド服。どちらも病気が引きこもりかと疑いたくなるほどの色白だが、少なくとも俺の方は今までもこれから色白である。どうも皆さま、代理人あらため指揮官です。元は男性の人間でしたが、なんかんやあつて敵の戦術人形≡代理人≡になってしまいました。詳しくは前回をご覧ください。あの時二つ返事した俺も悪いが、まさか敵の戦術人形に入られるとは思いませんでした……また45を始め404小隊に会えるのはすごく嬉しいんだけどさ。もうちょっとこう、あるじゃん。しかも他の人間や人形に逆らえないって何さ。夜の営みが確実に受けに回されるじゃん。

「今セツ〇スするとき受けしか出来ないって思った？」

「人の心読むのやめてもらえませんか？」

「はっはっはっ、その辺りは相手と相談してやりな。一応404小隊のメンバーには制限緩和の権限を付与させたからね」

結局相手次第じゃないか。片手で数える程度だが45と夜の営みをしたことはある。が、最初優位でも結局逆転されて搾り取られていた。前の姿でこれなら、もし45が求めてきたら、もう終始やられっぱなしな未来しか見えない。

いかんいかん、こんな事考えるより目の前の事だ。ペルシカ女史に聞けば俺が死にかけてから3週間は経過している。俺にとっては数日も経ってない感覚だが、向こうにとっては3週間経過した事実に変わりはない。殴られるかもしれない。詰められるかもしれない。泣かれるかもしれない。それでも甘んじて受け止める。そして……

プシュー

ペットボトルから炭酸が抜けるような音と共にあの不健康そうな天才科学者ペルシカが入ってきた。

「今から指揮官君が来るけど中身入りは初めてだから間違っても殺しにかからないこと。いいね？ それじゃ指揮官君、入ってきて」

「失礼します」

聞き慣れない低い女性の声と共に入ってきたのはメイド服姿の色白女。間違いない、あの実験室のような部屋でカプセルに入れられていた鉄血の代理人だ。でも雰囲気と目つきは元の代理人の情報とは全く違う。まるで指揮官みたい。

「その、指揮官……だよね？」

9 が恐る恐る不安そうに聞く。それもそうだ。だって目の前にいるのは敵だもの。パッと見は敵、でも雰囲気と目つきは指揮官そのもの。この矛盾した存在に私の電腦はエラーを出しかけた。

「ああ、その……なんだ。心配させて済まなかったな」

けれども出かけたエラーはピタリと止んだ。姿と声は変わり果てても目を逸らして頬を掻く仕草と口調は指揮官そのものだった。ああ、本物だ。本当に指揮官が

帰ってきてくれた。

「指揮官！」

一目散に駆け寄り抱きしめる。男の筋肉質な感触も指揮官の匂いも無い。でも中は本物だ。もう何があっても離さないし、死なせない。指揮官は命を張って私を守ってくれた。今度は私が守り抜く。

そう固く決意しつつ久しぶりの指揮官を堪能することにした。

「えーっと、どういう状況なんだ？」

「指揮官は黙ってて」

「ア、ハイ」

今の状況を確認しよう。鉄血人形の代理人となった俺は感動の再会を果たすや否や、椅子に座らされUMP45にいわゆるだいしゅきホールドの体勢で無理やり抱きつかれている。さらに9が背後から抱きつき、左腕にはG11が器用に抱きついて寝ており、右腕は416がまんざらでもない表情で寄り添っている。要するに、

身動き出来ない状態だ。

「……45は何をしてるんだ？」

「マーキング」

マーキングって……

「薬品と彼奴らの匂いするから私たちで上書きしてるの」

「そ、そうか……」

一応I F FはGとKのものになってるから誤射の心配はないはずだが。というかそんなに薬品の匂いがあるのか、それとも単に45の嗅覚センサーが鋭いだけなのか。しかし感動の再会を果たしたとは言え身動きできないと暇でしょうがない。少しでも腕を動かそうとするとG11と416がさりげなく止めにかかる。まるで「この腕は私のものだ、許可なく動かすな」と言わんばかりに。この子たち前からこんな感じだったっけ？

そうだ、会ったら1つ言いたいことがあったんだ。

「なあ、1ついいか」

45の動きが止まった。45だけじゃなく全員の意識が向けられ、G11もなぜか

既に目を覚ましている。

「その……なんだ、心配かけて本当に申し訳なかった」

「……バカ、すっごい心配したんだから」

涙を浮かべ上目遣いで見つめる45、今までこんな表情を見せたことはなかった。……よっぽど心配かけたようだ。

「本当にすまない。どうか許してくれ」

「……みんなの言うこと何でもしてくれる？」

「ああ、何でもするさ」

それが償いになるなら。この言葉にさっきまでの泣きかけた45の顔が嘘のように笑顔になる。

「9、416、今の録音した？」

「バッチリ録ったよ！」

「ええ、清々しいほど完璧にね」

あつ、45お前まさか言質取る為にやりやがったな！　してやったりみたいな顔しやがって！　確かに45と皆に心配かけた代償に何かしようとは思ったが、45の

顔からして碌なことにならないぞこれは。やばい、逃げようにも9と416がちり腕を掴んで離さない。ペルシカの「人間と人形には逆らえない」の1文が脳内で反復する。この状況と逆らえないプログラムから導かれる答えはただ一つ。

「まずは、指揮官にオンナの子の事、じっくり教えてあ・げ・る♪」

犯される。45がするりと服を脱ぎだし両脇の二名も器用に俺のメイド服を脱がし始めた。そうだ、G11は参加してないから止めてくれるかもしれないn

「じゃ終わったら言ってね。あたし隣の部屋で寝てるから」

G11お前裏切ったな！ あっ、45やめっ、そこ触るな！

開放されたのは約1時間後。何されたかって？ 妙につやつやで満足気の45と真っ赤な顔で死んだ目した俺を見て察してください。とりあえず男としての尊厳は木端微塵にされたことは言うておく。

この後は未定です。指揮官が45にナニされたかは御想像にお任せします

指揮官が代理人になりまして

著者 スツーカー

発行日 2019 年 8 月 25 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/182646/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
